The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スペイン語のいわゆる可能法について : その用法の歴史的変遷と名称について
Author(s)	伊藤, 太吾
Citation	Estudios Hispánicos. 1978, 4, p. 29-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93576
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スペイン語のいわゆる可能法について

—— その用法の歴史的変遷と名称について ——

伊　藤　太　吾

序）スペイン語の動詞 amar の活用した形に amaría 及びhabría amado というのがある。可能法又は条件法などと一般には呼ばれている。この動詞の形は現代語では６種の意味を有すというが，拙論ではそれらの用法の歴史的変遷を調査したい。そして，できればこの動詞の形に私なりの名称を与えたいと思っている。別に今更寝た子を起こすようなことをしなくてもといわれるかも知れないが，実の所，湿気の多い夏の夜，床についてはいても寝ぐるしくてまだ寝つかれないでいる状態なので，早く楽に眠らせたい親心からである。しかし何分若い親なので，上手くいくかどうか，かえって不快指数を増す結果になる可能性は十分にある。eventual だから。

Ｉ）この動詞の形の名称については以前から論議が絶えていない。当の Academia 自身以前の文法書ではpotencial（可能法）と呼んでいたのを最近の文法の Esbozo では condicional と呼んでいることからうなづける通りいろいろと意見の不一致を見るのであるが，少し代表的な文法家達の説をみてみよう。

Ａ）Criado de Val（1969）は，el encontrar unas denominaciones que abarquen todo el significado de las formas verbales es un propósito condenado de antemano al fracaso.Lo más que se consigue con sistemas revolucionarios como el de Bello es aumentar la confusión y caer en los mismos defectos que se critican. Siempre habrá pluralidad de significados en un mismo tiempo, y siempre, por tanto, sería preciso denominarlo mediante varios nombres.

El camino más práctico, a nuestro juicio, consiste en recoger las antiguas denominaciones, prescindiendo de darles un valor absoluto y simplificándolas con el fin de que su uso sea cómodo y sencillo.

と言っているが，私も基本的には氏の考え方に賛成である。氏は amaría

という形を condicional simple と呼び，habría amadoという形を c. compuestoと呼んでいる。そして，自ら穏健・中道派であることを認めているようである。

次に，Bello が最も革新的で，Academia が最も保守的であるような印象が強いので，両者の命名法と Lenz のそれとを見よう。

B）Real Academia Española（1931）によると，amaríaはmodo potencial の(forma) simple 又は imperfectoであり，habría amado は compuesto又はperfectoであるという。動詞の法には，不定法・直説法・可能法・接続法・命令法があり，直説法が事実をありのまま客観的に述べるのに対し，可能法は事実をありのままではなく起り得る（posible）こととして述べる法であるという。Martínez Amador（1953）の解説によれば，このamaríaという形と接続法不完了過去amaraとの形態的類似を気にし乍ら，両者を1917年以来分立せしめた為もあり、又amaríaがギリシャ語のoptativo(希求法)に類似していることからして，Academia は可能法という名称を考案したそうである。

しかし，起り得ること（可能なこと）は接続法でも表すことができるから，別に可能法の専売特許ではない。次の例で考えてみよう。イ）Tu hermano dice que viene en seguida. を過去時制にすると，ロ）Tu hermano decía(dijo)que vendría en seguida.となることも考えられる。そしてイ）の文の未来形は ハ）dice que vendrá となろう。すると，ハ）のvendráは直説法であるからロ）の vendríaも直説法であると言えそうである。そして，その amaría という形態がamar＋(hab)íaに由来していることを考えれば尚更直説法に賛成したくなるかも知れない。しかし，接続法の過去amaraは，ラテン語では直説法であるからそして直説法大過去としての現在の用法もあるから直説法である言ったら語源的には正しくとも現実的ではないと同様に，直説法とは言い切れない。ところで，起り得ることは接続法でも表すことができると言ったが，それはニ）Es posible que lo consiga.という文章を過去にすると，ホ）Era posible que lo consiguiera. とは言えても，ヘ）※ Era posible que lo conseguiría. とは言えない。だから，接続法とは別の法であり，しかも直説法とも異るし，可能法という名称もぐあい悪いということになる。

C）その様なことを考えてかどうかは不明であるが，Academia（1973）は，

condicionalと言っている。しかし，今度は法としての名称ではなく，あくまでも直説法の項目の中で timpo condicional（条件時制）として使っている。472頁で条件時制と呼ぶ理由を説明しているので引用する。

Por su carácter de tiempo futuro, la acción que expresa es siempre eventual o hipotética, como en todos los futuros. Por otra causa, su empleo más frecuente y característico ocurre en la apódosis de las oraciones condicionales. De aquí el nombre de *condicional* que damos a este tiempo.

この説明によると，もっとも頻度の高い用法は条件文の帰結節中であるという。実のところ，私達はこういう種類の論議をするに当り，胞括的名称を求めているのである。

さて，法の中で一番胞括的と言おうか，名称＝内容に見えるのは命令法であろう。命令法は命令を表わす。しかし反対に命令を表すもの全てが命令法かと言うと，直説法未来形（２人称）があるし更に不定法（詞）もある。この様に裏から見ると必ず矛盾と言おうか表し切れない要素が出現してくる。極端な話をすれば，１つの名詞でその概念を全て表すことができるのであれば品質形容詞なるものは不必要になってくる。ところが現実に品質形容詞が存在するのは，形態上限りのある一ケの名詞に多くの概念を表現さすことが不可能であることによるのである。そのようなことから，私は amaría にどういう名称をつけようと満足のいくものは決してでてこないということは十分承知している。赤子に名前（個有名詞）をつける場合とは全く違うのである。碩学の府 Academia でさえ，その実質即ち用法自身あまり変化を見せない60年間に３度呼称を変えた程であるから，むずかしさは推察できる。しかし，それにしても，名称を聞いただけで全概念が把握できる名称があるにこしたことはない。そして，それはできるだけ実用的なものでなければならない。

D）Lenz は 432頁で，

No puede caber ninguna duda de que *cantaría* debe considerarse como subjuntivo en castellano, por la sola razón de que su traduccion latina, por ejemplo, en la apódosis de una oración hipotéca, se da por una forma de subjuntivo (*si haberem, darem*＝*si tuviera o tuviese, daría o diera*) ……

El carácter de indicativo de la forma *cantaría* se puede probar fácilmente estudiando su uso en proposiciones dependientes……*cantaría* no se debe considerar como una forma del subjuntivo, sino que es indicativo y está en la misma relación con el tiempo de pasado en que se halla el futuro para con el presente, es decir, es un《pos=pretérito》o futuro del pasado.

La denominación *futuro condicional* que usa Salvá en su gramática, o simplemente *condicional,* como dicen algunos autores, según el modelo de las gramáticas francesas, tampoco me parece recomendable, porque es ambigua; *cantaría* no expresa una condición, sino una acción que sólo a veces depende de una condición, pero de ningún modo siempre… Respecto la denominación《condicional》, su principal ventaja sería la brevedad. と言っている。

この様に見てくると，接続法的な面も多分にあるし，直接法的な面も多分にあるし，又法の問題を別にすれば，多分に条件的であるというのがLenzの説であろう。ここまで見てきた段階で，果してamaríaという形態を何か1つの法に属さす必要があるかという疑問を私はいだくようになった。

E）Bello（1970）によると，amaríaは直説法のpospretéritoであり，Habría amadoはante=pos=pretéritoである。彼の時制区分は，文の相互関係において動詞の表す行為が共時的である（coexistencia）か前（anterioridad）であるか後（posterioridad）であるかに力点をおいて成されたものであり，複文の概念があることが判るが，これらの動詞形が必ずしも複文で使われるものではなく，又時間関係にとらわれすぎたきらいがあり，同時に術語としては冗長で複雑であるという欠点が目立つので，私は採用しない。

以上5種類の意見を見たが，これ以上見る紙幅はない。どの用法に力点をおくかで名称が異るし，どういう名前をつけても必ず欠点がありそうだということだけが判然した。

名称に関する結論を出す前に，次にこのamaríaという動詞の形がどういう役割を現代語で果し，又文学作品が現われた12世紀から9世紀間，どの様に使われて来たかを調査してみよう。

II）この amaría という形が現代スペイン語でどういう意味を表すことがができるか，主に Academia（1973）で調べてみよう。
a）Dijo que asistiría a la reunión. Han dicho que volverían. という2つの文中で，asistiría と volverían は dijo と Han dicho の時からは未来のことを表す。そして，時制は不完了なので，Prometió que me escribiría. と言った時 escribir したのかどうかは不明であり，発話時からすれば現在でも未来でも過去でもあり得るが，主節の動詞からすれば常に未来である。過去から見た未来完了は Habría amado という形で表される。Todos suponían que cuando llegase el invierno la guerra habría terminado.の中で，habría terminado は llegase よりも前に完了しているが，suponían から見た場合，llegase と habría terminado は未来の行為を表している。過去未来という人が多いので，あまり良い名称とは思わないが，私もこれを使う。
b）過去から見た未来を表すということは，未来時制が仮定的なこと未然のことを表すのと同様に，仮定的なことを当然表す。その様なわけで，最も頻度が高く特徴的な用法は条件文の帰結節に現れると言うが，果して最も頻度が高いかどうかは私の以下の調査で判明する。古典作家達の間では，この amaría という形と接続法過去の amara とは条件文の帰結節ではどちらを用いても良かったが，現代語特にスペインの知識層・文章語では amaría の方が一般的であり amara の方はきどった古風な文体に用いられる。amase は帰結節では用いてはいけないと教育の現場では教えるものの，実際には非教養語法としてわずか乍ら使用されているし，又バスク地方とブルゴスやサンタンデールに隣接する地方では，フランス語と同じく amaría が条件文の条件節に現れると言うし，更に進展して Usted me mandó que la avisaría という風に接続法過去の amara の代用をしてさえいる。habría amado という複合形は条件文では帰結節のみで用いられる。又，当然 hubiera amado も同じ意味で用いられ，更に hubiese amado という形も一般には用いられていて，Academia もこの用法を認める可きだと言っている。
c）次は，分配・役割の用法とでも呼べるものである。例えば，数人の仲間がいて，果す可き役割を決める場合に使われる。例えば，Yo leería, vosotros escucharíais. この場合直説法の未来形を使えば役割が絶対に果されるということを確信していることになるし，直説法の現在形で言うと

虚構性がなくなる。そして、Gili Gaya (1970) によれば，子供の言語では，主として直説法不完了過去が使われ（例えば，María Moliner (1971) は，Yo era el papá y tú eras la mamá. Esta silla era el castillo. Tú venías a visitarme. という3例をあげている)，amaría という形が固定化するのは比較的成長してからであると言う。

d）婉曲用法とでも言えるもので，poder deber saber querer などの様態動詞では，接続法の－ra形又は直説法不完了過去形と入れ代え可能である。例えば，Antes de casarse, la mujer debería〔＝bebiera o debía〕ver unos meses a su novio en zapatillas. Deberías〔＝debieras o debías〕tener más cuidado. など。

e）過去における推量を表す。直説法不完了未来形が現在（及び未来）の推量を表すと同様に，haber が過去になると過去の推量を表すのは当然である。代表的な例として，Serían las diez. の類の文をあげることができる。

同時に譲歩を表す役目があるが，それは直説法不完了未来が現在のことがらにやさしく返答する場合に用いられるのに似ている。これを別の項目にするにはあまりにもe）の項目に似ているのでここに含めると言う。例として，Sería fea, pero tenía una gracia extraordinaria. という文があげられている。

過去完了の推量は habría amado である。例えば，Y dijo entre sí que tales dos locos como amo y mozo no se habrían visto en el mundo. Enrico habría tenido una vida borrascosa, habría cometido innumerables delitos; pero conservó siempre inalterable su fe. という2文は良い例である。

f）丁寧な（modestia o cortesía）表現をするのに用いられる。例えば，Me gustaría verlo otra vez. という文は Deseaba verlo otra vez. の如く直説法不完了形を使ってもほぼ同じである。又，この種の文を完了にしようと思えば habría amado という形にすれば良く，これは同時に hubiera amabo と言っても hubiese amado と言っても同じである。例：Habría〔＝hubiera o hubiese〕querido hablar con usted un momento.

以上見て来た如く，動詞の amaría という形には6種類の用法があることが判るが，私の目的は，これらの用法の頻度が歴史的にどの様に変化し

たかを見ることにある。Criado de Val (1969) は，La Celestina における amaríaの用法は， hipotético, ponderativo, futuro obligativo, desiderativo の4種類であると言うが，私は Academia の上記の6種の分類方法を用いることにする。

III) 現代語におけるこれら6種類の用法の頻度をまずMiguel Delibes ：El camino（全221頁）についてみてみると表(1)の如くなる。

順位	項　　目	回数	%(約)	
1	a（過去未来）	58	47	
2	e（過去の推量）	35	28	
3	b（帰結節中）	17	14	
4	d（婉曲用法）	13	10	
5	f（丁寧用法）	1	1	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(1)）

当然のこと乍ら，何の偏見もまじえずに分類したつもりではあるが，例えばⓓとⓕの区別をはじめとして各項目間の微妙な差の識別を困難に感じることが時々あった。Academia (1973) の言う帰結節中の用法が一番頻度が高いということが否定されなければならない結果になったのが何よりもおどろきである。しかし，この様な結果は Delibes という作家の個人的クセによることもあり得るし，同時に作品の内容にもよることは確かである。あと一度同一作家の La sombra del ciprés es alargada（全 278頁）についてみたら，下の結果が得られた。

順位	項　　目	回数	%(約)	
1	e（過去の推量）	89	34	
2	a（過去未来）	73	28	
3	b（帰結節中）	56	21	
4	d（婉曲用法）	27	10	
5	f（丁寧用法）	13	5	
6	c（分配・役割）	2	1	（表(2)）

表(1)と(2)で異る点は，ⓔがⓐを追い越して1位になっていて，帰結節中で用いられる率がわずかに上っていることであるが，それ以外順位は入れかわってはいない。

同一作家の用法のみ考察するのは賢明ではないので，次に Camilo José Cela：Nuevo retablo de Don Cristobita（全 297頁）について調べてみた。

順位	項　　目	回数	%(約)	
1	e（過去の推量）	52	37	
2	b（帰結節中）	31	22	
3	f（丁寧用法）	21	15	
4	a（過去未来）	17	12	
5	d（婉曲用法）	11	8	
6	c（分配・役割）	8	6	（表(3)）

表(3)が(1)・(2)と大きく異る点は，ⓕの為に使われている率が大きく増していて，過去から見た未来を表す用法が下位に来ていることである。Delibesとの個人的差異は否定できない。ここでは，帰結節中の用法が2位に上っている。

今まで2人の作家による3つの現代作品を見て来たが，2人とも男性作家なので，念の為次に女性作家2人を調査してみよう。

まずCarmen Martín Gaite：Entre visillos（全 260頁）の結果は次表の通りである。

順位	順　　位	回数	%(約)	
1	e（過去の推量）	43	33	
2	b（帰結節中）	32	24	
3	a（過去未来）	26	20	
4	d（婉曲用法）	18	14	
5	f（丁寧用法）	13	10	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(14)）

この結果を見て判ることは，女性らしさを言語面持に今扱っている動詞

の形に求めることはできない否求めようとする必要はないということである。それは当然のことではあろうが，女性作家の登場人物が女性ばかりとは限らず，又女性が男性よりⓓやⓕの言いまわしを多く用いるとは限らないからである。しかし，１人の例だけで女性言語を云々するのも考えものなので，次に Carmen Laforet：La isla y los demonios（全307頁）について調査してみよう。

順位	項　　目	回数	%(約)	
1	e（過去の推量）	74	30	
2	a（過去未来）	71	29	
3	b（帰結節中）	56	23	
4	d（婉曲用法）	23	9	
5	f（丁寧用法）	16	7	
6	c（分配・役割）	3	1	（表(5)）

表(5)の結果からは表(4)の場合と同じく女性特有の表現があってそれが高率をしめているとは考えられない。しかも，この表の結果は表(2)の結果と極めて類似していることに注目したい。即ち，用いられている用法の順位は全く同じで，その率もほぼ接近しているのである。

以上の５つの作品を通じて言えることは，

イ）男性と女性による差異は認められない。

ロ）過去の推量を表す用法が極めて高率で，

ハ）Academia（1973）の言う帰結文中の用法は３位で，

ニ）過去未来の用法も高率を占めるが，

ホ）過去の推量・過去未来・帰結節中の用法の合計が全体の80%を占め，

ヘ）婉曲用法・丁寧な表現の為にはあまり使われず，

ト）分配・役割の表現は極めて少い。

以上のことが言えると思うが，これを具体的に数字で示す為に上記の５つの作品で用いられている平均値を次に示してみよう。

順位	項　　目	回数	%(約)
1	e（推過の推量）	293	33

2	a（過去未来）	245	28	
3	b（帰結節中）	182	20	
4	d（婉曲用法）	92	10	
5	f（丁寧用法）	64	7	
6	c（分配・役割）	13	1	（表(6)）

以上の結果が，現代の用法別順位だと言えると思う。もっとも，現代語の小説に限った為に上の如き結果になったが，いろいろなジャンルの作品を調べれば順位は変る可能性はあるだろう。今回は，上の結果になるのにどの様な歴史的変遷を経ているかを調査したい。

Ⅳ）12世紀を代表して，Cantar de Mio Cid（全3730行）について調査した結果は表(7)の通りである。

順位	項　　目	回数	%(約)	
1	a（過去未来）	26	38	
2	b（帰結節中）	13	19	
3	d（婉曲用法）	11	16	
4	e（過去の推量）	10	14	
5	f（丁寧用法）	7	10	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(7)）

表(6)の現代語における用法と比較してみて共通する点をまずあげてみると，５位と６位に来る用法が同じことである。ただし，分配・役割の用法はまだ現れていない。そして，平均的現代語の用法と異る点は，過去未来の用法が非常に高率であることである。これは表(1)に見る Delibes の用法と一致する。amar＋(hab)ĭa という語源通りの用法が高率であるのも当然と言える。そして，形態的なことに一言触れると，678行に aver vos los iedes de far の如き割れた形があったり，989行に non nos dexarié por nada というような形があったりで，形態上の一致はまだ見られない。

次は13世紀を代表して，Berceo: Milagros de Nuestra Señora（3644全行）について調べてみると，表(8)の如くなる。

順位	項　　目	回数	%(約)
1	d（婉曲用法）	46	29
2	e（過去の推量）	39	24
3	b（帰結節中）	35	22
4	f（丁寧用法）	21	13
5	a（過去未来）	20	12
6	c（分配・役割）	0	0

（表(8)）

この文体の特徴は，その内容の宗教と大いに関係があり，ⓓの用法が高率で首位を占めるのは当然であるが，区別のしにくいⓕの用法を加えると，全体の40%以上になることは驚異である。Cantar de mio Cid で首位にあったⓐが5位に落ちているのは，やはり内容と関係がある。形態的なことと語順に触れると，88行のDexarlo yen grado, no lo querrien levar の如く，文頭には依然目的格代名詞は来れず，文中では動詞の前でも後でも良い不安定な時代である。

次は，14世紀を代表してDon Juan Manuel：El Conde Lucanor（第1部全51話）について調べてみると表(9)の如くなる。

順位	項　　目	回数	%(約)
1	a（過去未来）	142	33
2	d（婉曲用法）	121	28
3	b（帰結節中）	114	26
4	e（過去の推量）	36	8
5	f（丁寧用法）	20	5
6	c（分配・役割）	0	0

（表(9)）

表(9)を見て気づくことは，頻度の順位が表(7)に似ていて2位と3位が入れ代っているだけである。いろいろとクセのある文体ではあるが，初めての散文であるからこの数字には大いに意義がある。形態的・統辞的なことにすこし触れると，…*plazerme yá* que sopiéssedes lo que conteció a un rey con un omne…（XX話）という形が圧倒的に多く，…mucho *me plazería* que sopiéssedes lo que conteció a un christiano …（LI話）は極めて少い。

又，第XXVIII話に1回だけEt el rey óvolo por muy estraño; et preguntol cómo *podría* esto ser. とあるが，この意味の文は殆んど毎話出てくる表現で，すぐ上には，El conde le preguntó cómmo *fuera* aquello.とある。podríaとfueraは，動詞も法も異るのではあるが，同じ意味で使われているのはとても興味のあることである。この場合，fueraが直説法なのか接続法なのか決定はむずかしい。14世紀でさえそうなのだから，現代語では尚更であろう。

あと1つ非常にめずらしい例がある。それは第XXVII話であるが，（El emperador Fradrique）quisiera muy de grado, si *podría* seer, que los partisse el Papa. に見る如く，条件節に現れているのである。これは，仏語やスペイン北部の方言の用法と一致するものである。

次は15世紀を代表して（というには15世紀の一番最後の年であるが），Fernando de Rojas: La Celestina について調べてみると，表(10)のような結果が得られた。

順位	項　目	回数	%(約)
1	b（帰結節中）	58	41
2	f（丁寧用法）	40	28
3	d（婉曲用法）	38	27
4	a（過去未来）	4	3
5	e（過去の推量）	3	2
6	c（分配・役割）	0	0

（表(10)）

これは，極めておどろく可き結果である。何よりも特筆に価するのはⓑの用法が40%を上まわる高率であり，区別が時としてむずかしいⓕとⓓの用法を合わせると55%以上になる。これは，理由は簡単である。まず第一に，恋愛小説（？戯曲）であり，それ故仮説的なことが多いから必然的に帰結節で用いられる場合が多くなる。そして，登上人物の色分けが非常に明確で，主人と下男の会話体の文が多い為である。ⓒの用法が相変らずないのは別におどろくに価しないが，Cantar de Mio CidとEl Conde Lucanor で1位であった過去未来が語源的・本来的用法であるだけに，頻度が低いのが注目に価する。

この作品については Criado de Val（1969）の研究がある。第一部とそれ以降の作者が同一人か否かに力点がおかれているが，私は氏と同じく作

者２人説を支持するものであるが，今回はそのことは関係なく，通して調査した。

次は，16世紀を代表してJuan de Valdés: Diálogo de la Lenguaについて調べてみよう。

順位	項　　目	回数	%(約)
1	f（丁寧用法）	65	45
2	d（婉曲用法）	43	30
3	b（帰結節中）	28	20
4	a（過去未来）	7	5
5	c（分配・役割）	0	0
6	e（過去の推量）	0	0

（表(11)）

これは４人の登上人物による会話体の作品であり，事実上は Juan de Valdésが自身の言語感を語るようになっている。子弟に物語る文体なのではあるが極めてへりくだった表現をしている為にⓕとⓓの用法の合計が75%に達しているが，これは La Celestina を上廻る数字であり，しかもこれらの用法が１・２位を占めている。３位に来るのが帰結節中の用法であり，これもある意味では謙遜した表現とも取れるので，全体の文体は肩のこる調子であると言える。あと１つの特色は，内容からして当然ではあるが，ⓔの用法が全くないということである。これは，前世紀の La Celestina においても少なかった。

Keniston（1937）によると，La vida de Lazarillo de Tormes（62. 1）に，le suplicaron…si en algo podria aprovechar…por amor de Dios lo hiziesse という例があるという。更に，条件節において接続法過去の代りに podria debria などが現れることがあると記している。私は14世紀の El Conde Lucanor に同じ例を見つけたことを記したが，この用法は多分頻度は高くなかったであろう。

次に17世紀を代表してMiguel de Cervantes: Novelas Ejemplares（全2冊）について調べてみると，結果は表(12)の如くなる。

順位	項　　目	回数	%(約)
1	a（過去未来）	74	41
2	f（丁寧用法）	35	19
3	d（婉曲用法）	30	17

4	b（帰結節中）	27	13	
5	e（過去の推量）	14	8	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(12)）

この表の特徴は，ⓐの用法が40％を越す高率であることと，ⓓとⓕの用法が依然と高率で，両者の合計が35％を越している。又，形態面に触れると，…y *atreveríame* a hacer…(II;171)，*parecermehía* a mi que…（II;152)という相異る形がまだあって，なお不安定な時代である。

次に，18世紀を代表して Jovellanos：Obras Escogidas（全２冊）について見ると，表(13)の如き結果が得られた。

順位	項　目	回数	％(約)	
1	f（丁寧用法）	71	50	
2	b（帰結節中）	32	22	
3	b（婉曲用法）	22	15	
4	e（過去の推量）	17	12	
5	a（過去未来）	2	1	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(13)）

この結果は，評論文から推察できる当然の結果であるとも言える。Juan de Valdés でもⓕが１位で45％であったが，今回はそれを上廻る50％に達している。形態的には，前世紀まで見られた不定詞＋代名詞＋(hab)ía という形態はもはや見られない。Academia が設立され，そろそろスペイン語の真の意味での確立期に入った一例である。

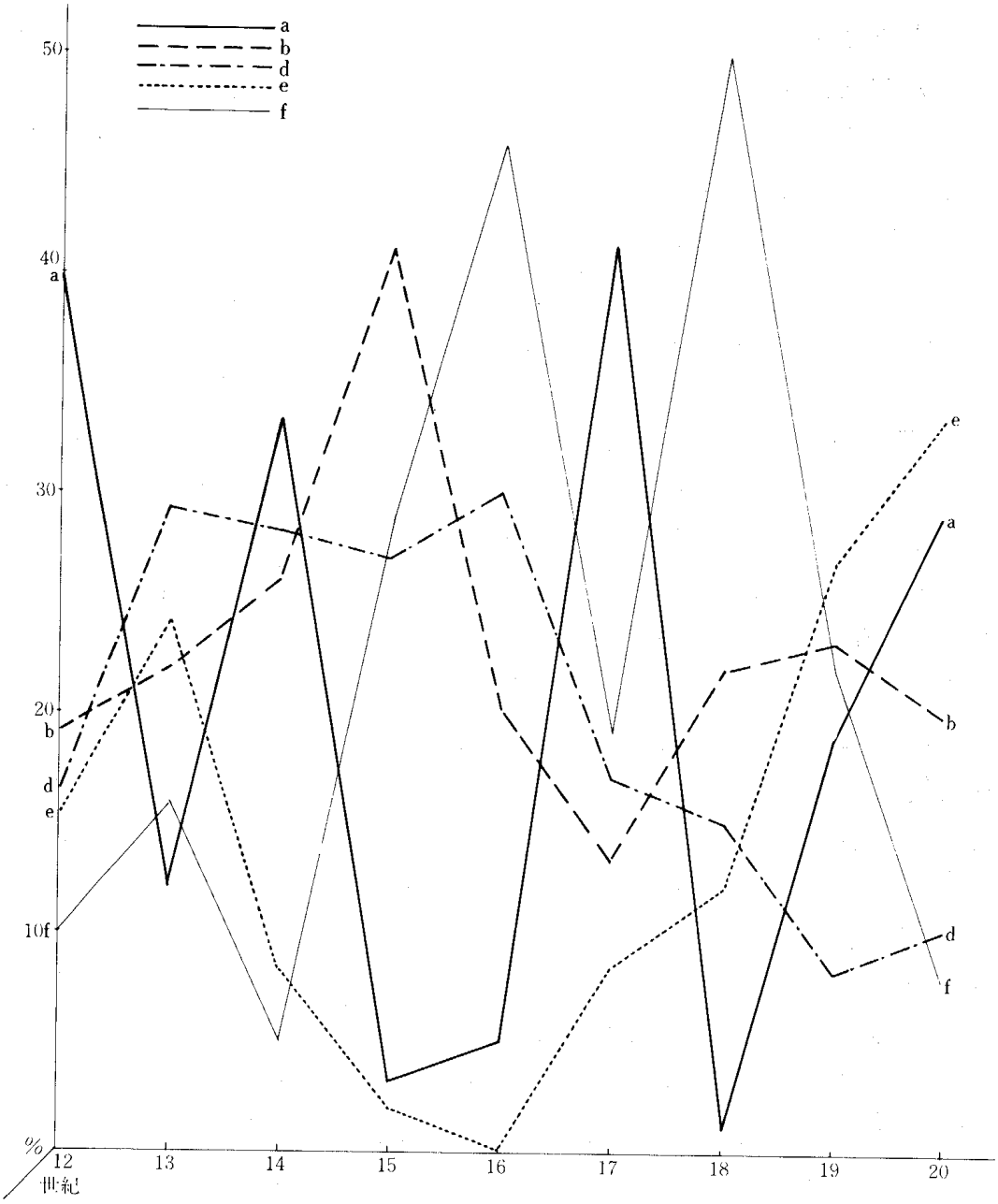
次は，19世紀を代表して，Benito Pérez Galdós：Tormento について見てみよう。

順位	項　目	回数	％(約)	
1	e（過去の推量）	64	27	
2	b（帰結節中）	55	23	
3	f（丁寧用法）	52	22	
4	a（過去未来）	46	19	
5	d（婉曲用法）	19	8	
6	c（分配・役割）	0	0	（表(14)）

今まで調べて来た歴史的作品の結果と比較して見て，過去の推量の用法が最高位に来るのはこの Tormento が最初であり，しかも現代語の用法と

一致する点が注目に価する。そして，上位4用法がそれぞれ20%前後の平均した使用頻度であったことが判る。①の用法は歴史的作品の中ではついに見られなかった。尚この作品の中にも，**cuando chupaba un cigarro *creeríase* que lo fláccidos labios se le metían hasta la laringe** という擬古形が見られるが，例えば，**creer＋se＋ía** という形は前世紀から全く見かけない。

V）今まで見て来た9世紀の変遷の結果は次に示す折れ線グラフの通りである。



実は私がこの調査を思いたった時，中世の段階では頻度が低く，近代・現代になるに従って高くなるような用法あるいは逆の変遷をした用法はないか，つまり上の様なグラフにした場合ほぼ直線になるものはないかと期待していたのであるが，果してガウディの聖家族教会の様な図になってしまった。神秘的で私には分析できないということを物語っている様な感じであるが，グラフを見て私なりに気づく事柄は，

1）全般的に，どの用法も9世紀間安定した頻度を保っていない。

2）語源的・本来的である過去未来の用法が12世紀では高率であったのが，極端に上下する。

3）最も安定した頻度で使用されて来たのは，帰結節中の用法である。実は，上のグラフを見た限りでは，16世紀に急に下降し17世紀も頻度は高くはない。そして，18世紀以降回復して今日に至っているが，16・17世紀は考えようによっては頻度は高かったと言える。と言うのは，Keniston (1937) によれば，16世紀にはまだ，si tuviere, habría dado とかsi tuviese, diese とかsi tuviese, diera とかsi tenía, diese とかsi tuviera, daba とかsi hubiese tenido , diese とかsi tuviere, diera とかsi tuviese, dará とかの組合せが多かったと言う。これら殆んど全て今日の帰結文ではdaríaを使うはずである。それにもかかわらず，16世紀に帰結節中での用法が20%というのは高いという意味である。尚，Gordon (1964) によると，帰結節では，中世から現代になるに従って，接続法過去—ra形よりも—ría が用いられる傾向にあると言うが，その傾向もグラフに現れていると言えよう。

4）婉曲用法は，13・14・15・16の4世紀間は連続して高率であり，しかも各世紀の代表作品は種々のジャンルにわたっているだけに，注目すべきことである。

5）丁寧用法は，ValdésやJovellanosの如き評論的なものに多いが，現代小説には両者とも少い。

6）分配・役割の用法は今回調査した19世紀以前の作品には見られないので，いつが初出年代であるか今後興味が持てる。

7）作品の性質・ジャンルによって各用法の使用率が異り，時代・年代別の傾向は認められない。即ち，すでに12世紀からⓒを除く5種類の用法は一般的に使われていたということである。これは，形態・音韻が12世

紀から16世紀頃まで極めて不安定であったことを思うと，注目に価する現象である。同時に各項目の初出年代がいつであったかを調べることは今後むずかしくなったと言える。

以上の様な結果がグラフから読み取れるのではなかろうか。

Ⅵ）紙幅の関係で各世紀１作品しか調査できず又コメントを加えることも殆んどしなかった。さて，歴史的作品を見た結果この動詞形につける可き適当な名称があるか否かを考えたいとはじめに言ったが，結局私はamaríaという形は何法に属すかということは問題にしない方が良いと思う。別に臭い物に蓋をするつもりではないが，いろいろな意味において問題にしない方が良い事柄は世の中には多いし，又この場合はできないのである。全ての動詞には法と時制がある，あるいは必ずある法に属せしめるのが今までの伝統的考えのようで，amaría という形がラテン語になかった新しい形であるにもかかわらず，ラテン語のみに適用していた古い区分である接続法であるとか直説法であるとか言ってもあてはまるはずがないし，又新たに，Academia の旧文法の如く，可能法という新しい名称を造っても失敗したのだから，最良の方法は"法に触れぬ"ことだと思う。いくら分類しようとしても分類され得ぬのだから，ここらへんで止めることが賢明である。１＋１は３か４か決めろというのに等しく土台無理な話である。そして，法は人間の場合で言えば苗字の様なもので，苗字はあってもなくてもその人間をidentificarすることは十分に可能であり，日本では明治以前は庶民には苗字はつけられていなかったし，今日でも家庭内ではお互を名前だけで呼ぶのが最も普通であるのに似ている。

では苗字に価する法は問わないにしても，その名前は何が良いだろうか。前にも言ったが，名前を聞いて実体が判るような誤解を与えないような簡単明瞭な名称が良いというのが原則である。Academia は接続法だと言ったり可能法だと言ったりした。そして，それらの名称が不都合であることはすでに指摘したし，Academia 自身３回も反省している程だから，不合格であろう。Bello の用語は長すぎるきらいがあって実用的でない。Gili Gaya は直説法 futuro hipotético 及びantefuturo hipotéticoと言っているが，法は問題にしない方が良いという点は前に言ったし，hipotético という形容詞はともかく，必ずしもfuturoは全てに当てはまらない。

そして，今まで全く使われていなかったものの中から新しい術語を造る

と，可能法という名称が犯したと同じあやまちに陥る。その様な点を考えると，冒頭でCriado de Valの説を紹介した通り，今まで文法家達の間で使われて来た名称の中から選ぶ方が良い。12世紀から今世紀までの作品を調査して感じたことは，Vの3で言った通り，条件文の帰結節中での用法が歴史的に見て一番安定しており，又現代用いられる6種類の用法のうち少くとも5種類は多かれ少なれ〝条件的〟であることからして，私はcondicional という名称が良いという結論に達した。しかし，これを条件法と訳すと，仏語にも同じ名前の法がありしかも用法が異っていて混乱をおこすし，法は問題でないのだから，日本語に訳さず，例えば，amar のcondicional (simple o compuesta) という風に言いたい。同じcondicionalでもAcademia (1973) は直説法に属せしめていて多分la (forma) condicional のことなので，私とは異る．私の場合, Criado de Val (1969) に似ているのであるが，氏の根拠が判然としないし，又elなのかlaなのかも分らない。私が la (forma) condicional と呼ぶ理由は，あと一度言うと，上に調査した6つの異る用法どれをとってみても相当程度一定条件の下に（それが明示的であるか否かは別にして）成される行為を表している様に思え，しかも歴史的に一番安定した使用頻度を見せるのは，条件文の帰結節中の用法だからである。（77' 7 ）

BIBLI OGRAFIA

Criado de Val: El verbo español, Madrid, 1969.

Real Academia Española: Gramática de la lengua española,Madrid,1931.

Real Academia Española: Esbozo de una gramática de la lengua española, Madrid, 1973.

Martínez Amador: Diccionario gramatical, Barcelona, 1953.

Samuel Gili Gaya: Curso superior de sintaxis española, Barcelona, 1970.

Hayward Keniston: The syntax of Castilian prose, Chicago, 1970.

Calvin Gustav Gordon: The subjunctive mood in representative Spanish works from the twelfth to the eighteenth century, The university of Nebraca, 1964.

J enz: La oración y sus partes, (no place, no date.)

Andrés Bello: Gramática de la lengua castellana, Buenos Aires, 1969.

Miguel Delibes: El camino, Barcelona, 1969.

Camilo José Cela: Nuveo retablo de Don Cristobita, Barcelona, 1969.
Miguel Delibes: La sombra del ciprés es alargada, Barcelona, 1969.
Carmen Laforet: La isla y los demonios, Barcelona, 1969.
Carmen Martín Gaite: Entre visillos, Barcelona, 1969.
Anónimo: Cantar de Mio Cid, Madrid, 1964.
Gonzalo de Berceo: Milagro de Nuestra Señora, Madrid, 1968.
Don Juan Manuel: El Conde Lucanor, Madrid, 1969.
Fernando de Rojas , La Celestina, Madrid, 1968.
Juan de Valdés: Diálogo de la lengua, Madrid, 1969.
Miguel de Cervantes: Novelas ejemplares, Madrid, 1975.
Jovellanos: Obras escogidas, Madrid, 1955.
Benito Pérez Galdós: Tormento, Madrid, 1968.